OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Parental educational aspirations and children's sleep: a mediation analysis
Author(s)	山下, 絢
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/107013
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　（山下　絢）	
論文題名	Parental educational aspirations and children’s sleep: a mediation analysis （親の教育願望と子どもの睡眠：媒介分析による検討）

論文内容の要旨

【背景】

睡眠は心身の健康に重要であるが、日本の多くの子どもは推奨されている睡眠時間を確保できていない。一方、睡眠時間は文化的背景に影響を受ける。とくに、教育環境は文化依存的な睡眠時間の規定要因であると考えられる。競争的な教育環境では、親の高い教育願望（親が子どもに望む学歴達成）が子どもの学習時間を増やし、睡眠時間を短縮させる可能性がある。さらに、親の教育願望を反映する通塾が睡眠時間を短縮させる可能性がある。したがって、通塾は親の教育願望と子どもの睡眠時間との関連における媒介要因である可能性がある。しかし、教育願望や通塾と睡眠時間との関連を検討した研究の蓄積は、これまで限定的である。

【目的】

本研究の主な目的は、日本の小中学生を対象に、親の教育願望と子どもの睡眠時間の関連を明らかにすることである。検証するリサーチクエスチョン（RQ）としては、以下の3つを設定した。RQ1では、親の教育願望が高い子どもは、睡眠時間が短くなる傾向にあるかどうかを検証する。RQ2では、親の教育願望が高い子どもは、通塾傾向が高く、その結果、睡眠時間が短くなるかどうかを検証する。RQ3では、大都市圏に住む子どもは、非大都市圏に住む子どもよりも、これらの関連の影響をより強く受けるかどうかを検証する。

【方法】

本研究は、東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所が実施した全国規模の親子ペアデータ「子どもの生活と学びに関する親子調査」を用いた二次分析である。個票データの提供は、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから受けた。本研究の分析対象者は、小学校5年生から中学校3年生の子どもとその母親とした。結果変数である子どもの睡眠時間は、登校日の平均睡眠時間を設定した。曝露変数である親の教育願望には親が子に希望する最終学歴が大卒以上か否かを、媒介変数である通塾には通塾の有無を、それぞれ設定した。共変量には学歴（母親）、世帯収入、就業形態(母親)、子どものメディアの利用時間、性別、学年、学校設置者の種類、居住地（大都市圏または非大都市圏）を設定した。統計解析は、RQ1において最小二乗法による回帰分析を、RQ2およびRQ3において因果媒介分析を用いた。

【結果】

第1に、親の教育願望が強いほど睡眠時間が短い関連が中学生において確認されたが、小学生では確認されなかった。第2に、中学生において、その関連は通塾によって部分的に媒介されていた。第3に、非大都市の中学生において、親の教育願望が強いほど睡眠時間が短い関連が確認された一方で、大都市圏の中学生では確認されなかった。

【考察】

結果は、親の子どもに対する強い教育願望が「睡眠を犠牲にして勉強する」行動様式につながる可能性を支持する。ただし、親の教育願望そのものを介入対象とすることは現実的ではない。因果媒介分析の結果は、通塾のあり方や学習負担を見直すことが子ども、とくに中学生の睡眠時間を確保するうえで有効な戦略であることを示唆する。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　山下　絢　）			
	（職）		氏　名
論文審査担当者	主 査	教授	橘　雅弥
	副 査	教授	毛利　育子
	副 査	教授	千住　淳

論文審査の結果の要旨

当該論文は，日本の親の教育願望と子ども（小中学生）の睡眠時間との関連，およびその媒介要因としての通塾の役割を検討した研究をまとめたものである。

日本の子どもの睡眠時間は国際的にみても短く，その対策は喫緊の課題である。睡眠時間は文化的背景に強く規定されており，とりわけ競争的な教育環境のもとでは，親が子どもに高い学歴達成を期待することが学習時間の増大を通じて睡眠時間を短縮させる可能性がある。さらに，通塾は親の教育願望を行動レベルで具現化する経路として，睡眠時間との関連における媒介要因となりうる。しかし，親の教育願望・通塾と睡眠時間の関連を実証的に検討した研究は限られており，とくに大都市圏と非大都市圏の比較を含む検討はなかった。本論文はこの空白を埋めるべく，3つの研究課題を設定して検討を行った。

本論文のデータソースは，東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所が実施した全国規模の親子ペアデータ「子どもの生活と学びに関する親子調査」である。分析対象は小学校5年生から中学校3年生の子どもとその母親とした。結果変数として，登校日の平均睡眠時間，曝露変数として親の教育願望（最終学歴が大卒以上を期待するか否か），媒介変数として通塾の有無を設定した。共変量には，母親学歴・世帯収入・就業形態，子どものメディア利用時間・性別・学年・学校設置者の種類・居住地域（大都市圏・非大都市圏）を設定した。3つの研究課題に対応した統計解析（最小二乗法による回帰分析，因果媒介分析）が用いられた。

解析の結果，以下の知見が得られた。①中学生において，親の教育願望が強いほど睡眠時間が短かった。この関連は小学生では認められなかった。②中学生において，親の教育願望と睡眠時間の短縮の関連が通塾によって部分的に媒介された。③非大都市圏の中学生では，親の教育願望と睡眠時間の短縮との関連が確認された一方，大都市圏の中学生では確認されなかった。以上の結果は感度分析によっても支持された。

結果は，親の高い教育願望が通塾を介して「睡眠を犠牲にして勉強する」行動様式につながる可能性を支持するものである。とくに，通塾が媒介要因として同定されたことは，教育環境への介入によって子どもの睡眠時間を確保しうることを示唆する点で，公衆衛生的な含意が大きい。また，大都市圏では関連が認められなかったという知見は，競争的教育環境の影響が地域の教育資源の分布と複雑に絡み合っていることを示しており，本論文はこうした文脈依存性に対する新たな視角を提供している。

発表後，審査担当者は本研究の背景と目的，方法論の妥当性，所見の解釈と一般化可能性について質疑を行った。とくに，「親の教育願望」「通塾」という変数に着目した背景と定量化の根拠，分析対象の設定根拠，大都市圏と非大都市圏の結果の差異の解釈に関する質疑を通じ，発表者は幅広く深い洞察を示した。

発表者はこの論文を通じて，子どもの睡眠不足という社会的課題に対し，教育環境という規定要因の観点から重要な実証的知見を提示した。以上より，本論文が博士（小児発達学）の学位授与に値すると判断する。